皮膚科専門医からのアドバイス

監修　ひふのクリニック人形町　院長
東京慈恵会医科大学客員教授　上出 良一先生

光接触皮膚炎の 予防について

①露出しやすい部位に使用する場合には、患部を紫外線にさらさないよう、注意すること

ケトプロフェン外用剤による光接触皮膚炎に対するもっとも有効な安全対策は、**外用剤を使用した患部を紫外線にさらさない**ようにすることです。

●貼ったところを紫外線にさらさないようにしましょう。

② 使用後 4 週間は紫外線に注意すること

貼付している間は、外用剤の基布によりほとんどの紫外線が遮断されるため光接触皮膚炎が発症することはあまりありません（まれに通常の「かぶれ」が起こることはあります）。むしろ、外用剤による治療後、薬剤の残っている患部を紫外線にさらすことにより発症する例が多いものと思われます。**使用後 4 週間は、紫外線にさらさないよう患者さんに指導してください。**

③ その他の注意

ケトプロフェンによる光接触皮膚炎は、皮膚中に残ったケトプロフェンが長波長紫外線(UV-A)に曝露されることによって発症すると考えられています。UV-A は曇りの日にも十分な量が照射されています。また、ガラスによっても吸収されず透過するため、ガラス越しの光でも発症することがあります。

紫外線にさらさないためには

① **物理的防御**：UV-A を防御するには、衣服・サポーター・帽子・手袋などが有効です。

② **化学的防御**：**どうしても衣服等で遮光できない場合は**サンスクリーン剤（日焼け止め）も有効です。PA(+ ～ ++++)という指標で UV-A を防ぐ強さが表記されています。**ただし、オキシベンゾン、オクトクリレンを含有するサンスクリーン剤の使用は避けるように患者さんに指導してください。**オキシベンゾンはケトプロフェンとの交叉感作が、オクトクリレンはケトプロフェンとの共感作が報告されています。

光接触皮膚炎の 治療について

症状が発現したら･･･

発疹・発赤やそう痒感、刺激感といった初期症状があらわれた場合には、**直ちに使用を中止し、患部を紫外線にさらさないよう覆って、**受診するようご指導ください。

使用中止 →

比較的強力なステロイド外用剤を用いるか、ステロイドの内服や注射を行うことにより症状を抑えることができますが、**通常の接触皮膚炎（かぶれ）との鑑別や、原因物質の特定、再燃防止のためにも皮膚科医への紹介が望まれます。**

薬物治療 →

症状が消退した後も衣服等で**紫外線から患部の皮膚を守るように指導してください。**紫外線曝露により症状が再燃することがあります。

紫外線対策